

「もっとウキを知りたい～基本を覚えて使い分けよう～ウキ戦術～」

第5回のテーマは、浅ダナウドンセット釣り用のウキ。この釣り方は、ウキの機能が釣果に最もつながるといっても過言ではない。使うウキによって、サワリやアタリの数が変わって来るとも言える。

そこで今回はこの釣りに適した形状、素材構成、トップの塗りなどを紹介し、理想型を北村滋朗氏に紹介してもらおう。

浅ダナウドンセット用ウキのバリエーション

「尽心作」の浅ダナウドンセット用ウキには、Type-D3 を基準に改良した2つのタイプがある。

1つは「Type-D3 改」で、それぞれトップの長さを固定して、ボディと足の長さの比率を変えることで、オモリ負荷量を変えている。

もう1つは「Type-D3 変」で、ボディの直径を変えることにより、オモリ負荷量を変えている。

このように浅ダナ釣りにおけるウキのタイプが多い理由は、ウキの選択が釣果に影響を及ぼすからである。

Type-D3 改

●コンセプト

トップの長さを80mmに固定し、ボディと足の長さの比率を変えているため、それぞれのオモリ負荷量は違う。当然、立ち上がり方も違う。

このウキのメリットは①トップの長さを80mmに固定していることから、ヘラブナの活性に応じて他の2つのどちらに交換しても、バラケエサの持たせ加減を大きく変える必要がない②ウキの立ち上がりはテコの原理に基づいているため、ボディが短くオモリ負荷量が少ない方（写真右）は足を長くして、少ない力（オモリ負荷量が少ない）でもウキが立ち上がるようにしている。これにより、ウキを交換したときに感じる立ち上がりの違和感を緩和している。

具体的な比率は次の通り。

- ボディ60mm：カーボン足60mm
- ボディ55mm：カーボン足65mm
- ボディ50mm：カーボン足70mm
- ボディ45mm：カーボン足75mm
- ボディ40mm：カーボン足80mm

ボディ+足の長さは120mmで固定している。



Type-D3改：トップの長さは固定し、ボディと足の長さの比率を変えている
(写真は、ボディ40mm、50mm、60mm)

Type-D3 変

●コンセプト

トップ、ボディ、足の長さは同じで、それぞれのボディの直径を変え、体積を変えることによりオモリ負荷量を変えている。

足の長さを同じにしていることから、立ち上がり始めるタイミングはオモリ負荷量の大小によって変わる。具体的には、オモリ負荷量が少ないものは立ち上がりのタイミングが遅く、逆にオモリ負荷量が多いものは早い。

このウキの仕様は次の通り。

●ボディ：クジャクの羽根の1本取で、ボディの長さは50mm。ボディの直径は6・0mm、5・8mm、5・5mmの3種類

●トップ：ポリカーボネイトで細ストレート、長さは70mm。

●足：カーボンで1mm径（差し込み部手前の径は0・8mmと細い）。長さは60mm

ボディの直径だけを変えることにより、オモリ負荷量を変える製作手法は、両ウドンの底釣り用ウキをはじめ様々なタイプのウキにも採用されている。



Type-D3 変：ボディの直径のみを変え、オモリ負荷量を変えている

浅ダナウドンセット用ウキのトップの塗り

トップの塗りも、多彩なバリエーションがある。

トップ先端部は赤やオレンジが多かったが、最近は先端をグリーンにして、エサ落ち目盛りの位置を赤やオレンジにしているものもある。また、トップの形状もバリエーションがあり、ストレート、先端部分にややテーパを付けたものなどがある。

なぜ、これほどまでに浅ダナウドンセット用ウキのトップに工夫が施されるのか？

理由のひとつは、一定のなじみ幅にすることを容易にしたいからである。具体的には、トップのなじみ幅を一定に保つバラケエサの付け方は容易ではないが、それを少しでも簡単にしたい、という製作者の思いが多彩なバリエーションを生む原動力になっている。

「尽心作・匠」では、浅ダナウドンセット用ウキは細パイプトップのストレートにしている。

塗り幅は **Type-D** (写真左側。細パイプトップでテーパー付き) と **Type-D3** を見ればおわかりのように、微妙に変化させている。



左側：**Type-D** (浅ダナ用の標準で、テーパー付きの細パイプトップ)

右側：**Type-D3** (浅ダナウドンセット用で、ストレートの細パイプトップ)

Type-D、**Type-D3** ともトップ先端の目盛りは「やや広く」している。ただ、広すぎると、戻り際のアタリ（動き）がわかりにくい。**Type-D3** の先端1～3目盛りは微妙に塗り幅を広げ、4目盛り以降は同じ塗り幅とし、塗り幅を変化させている。

私が浅ダナウドンセットをやる場合、どうしてもバラケエサの付け方にバラつきが出るのでなじみ幅が一定にならない。そこでストレートトップの細で釣りをしたら、先端1目盛り残しでなじみ切るようになった。しかし、今度は塗り幅が気に入らない。

トップの塗装をはがし、先端1目盛りを除いて全部同じ幅に塗り直したが、

それでも気に入らない。今度は先端1～3目盛りの塗り幅を微妙に広げたところ、やっと落ち着いた。

私自身も含め、ウキが自分のテクニックの中で大きなウェートを占めている方にとっては、それなりのウキが必要なのではないだろうか？

浅ダナウドンセット用ウキのバランスについて

ここでは深く触れるつもりはないが、私にとってウキ全体のバランスが1番難しいのは、浅ダナウドンセット用のウキだと思っている。

特に①足の長さ②肩のしぼり加減③全体のバランスとオモリ負荷量の3つにポイントがあると考えている。

①足の長さ

最近の浅ダナウドンセット釣りの傾向として、ウキの足の長さはあまり長くない50～60mmが適切だと考えている。その理由は3つある。

1 長い足は、テコの原理によりオモリが高い位置でウキが立ち上がるため、沈下中の余計な雑音（動き）を拾ってしまう

2 また、沈下中の余計な雑音（動き）は、つい手を出してしまい、結果としてタナを凝縮しにくい

3 ウキを「シャキッ」と立たせたい。言いかえれば、ウキが立ち始めてから、直立するまでの時間を短くしたい。これも沈下中の余計な雑音を拾いたくないからだ

②肩のしぼり

逆に、ウキが直立してから後にでるなじみ途中の「サワリ」は、ある程度出したい。そのため、肩の絞り加減を工夫しなければいけない。

肩の絞りをきつくし過ぎる（急テーパーにする）とウキの重心の位置が肩寄りになり、テコの原理により、オモリが高い位置でウキが立ち上がり、ウキが立ち上がった後のウケが長くでてしまう。かといって、底釣り用のようになで肩（ゆるいテーパー）にすると、ウキの重心の位置が脚寄りになり、オモリがかなりなじんだ位置でウキが立ち上がり、肩でウケることなくすんなりとなじんでしまう。

③全体のバランスとオモリ負荷量

この釣り用のウキのボディは、多くが長さ40～70mm、足は50～60mmのため、トップは60～90mmだとバランスが良いと考えている。

ウキの立ち上がりはテコの原理に基づくことから、各パーツのバランスが悪いと、ウキが気持ちよく「シャキッ」と立たない。さらに、2010年12月号の「両ウドンの底釣り編」で紹介したように、表面張力がウキのオモリ負荷量

よりも勝ってしまうと、ウキの立ち上がりが極端に悪くなってしまいます。
ウキを軽く仕上げる、つまり、十分なオモリ負荷量が求められる。

トップを見る目の錯覚

どうして、トップの塗り幅にもこだわるのか？

それは「トップを見る目の錯覚」に由来している。通常、トップの塗り幅は、先端部になればなるほど広い。

また、トップの塗りはなぜ①赤②黄緑③オレンジ④黄緑⑤赤（以下、同じ配列で続く）や①オレンジ②黄緑③赤④黄緑⑤オレンジ（以下、同じ配列で続く）が多いのでしょうか？

「トップを見る目の錯覚」を考察することにより、トップの塗りについて解説したい。

カラーでお見せできないのが残念だが、写真1～3をご覧ください。

●写真1＝カラーで見ると、先端が太い逆テーパートップのように見える。配色や塗り幅は「尽心作」標準のトップの塗り。実は、1・4mm径のストレートトップである。

写真1



ストレートトップで、「尽心作」では標準のトップの塗り

●写真2 =先端にいくほど塗り幅が狭く見える（ただし、先端の赤と2目盛り目の白を除く）。トップ先端の赤と2目盛り目の白を除き、他の目盛りの幅はすべて7mm。

写真2



テーパー付きのトップで、トップ先端の赤と2目盛り目の白を除き、他の目盛りは7mm幅で塗っている

●写真3 =先端から2目盛り目の白が他の目盛りと比べて細く、かつ幅が狭く見える。しかし、トップ先端の赤を除き、他の目盛りは10mm幅で塗っている。1・0mmのガラスソリッドでテーパーは付いていない。

写真3



トップ先端から2目盛り目の白は他の目盛りと比べて細く、かつ幅が狭く見えるが、先端目盛り以外は同じ幅だ

トップをみる目の錯覚の解説

逆テーパートップを除き、多くのトップは先端が細くなるようにテーパーが付いている。これは、ウキが立ち上がる際の水の表面張力を軽減するためである。

テーパー付きトップの場合、写真2のようにほとんどの目盛りを同じ幅で塗ると、上部ほど幅が狭く見えてしまう。これでは風で波立つ際に、細かすぎて見づらいことがある。だから多くのトップの塗り幅は、先端にいくほど幅が広がっている。

逆にテーパーが付いていないストレートトップの場合、先端にいくほど広く塗ってしまうと、逆テーパートップのように見えてしまう。

また、色には暖色と寒色があり、暖色は赤、オレンジ、黄などの色が該当する。これらの色は実際よりふくらんで見える膨張色であり、進出色といって近くに感じる色でもある。

写真3で赤が太く膨らんで見え、白の幅が細く狭く見えたのは、これが理由である。

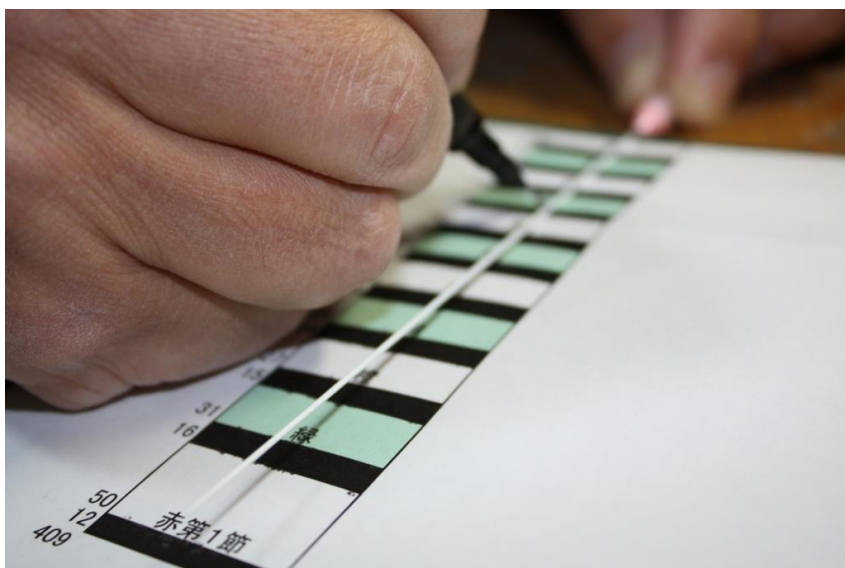
だからといって、赤やオレンジのような暖色ばかりで配色すると、コントラスト（明暗の差）が弱くなり、見づらくなってしまう。コントラストを出すために、赤やオレンジの間に中間色的な黄緑をはさむのである。そして、「アタリ

を取る位置」や「エサ落ち目盛り」に見やすい暖色系の赤やオレンジを配色するのが、一般的なトップの塗りである。

「尽心作・匠」では、トップの塗りの際、表計算ソフト「Excel」で作成したシートを使っている。

このアイデアは、名古屋のへら正さん（ハンドルネーム）から教えていただいたのだが、僅かな塗り幅の違いも正確に表現することができる。

コメントの追加 [K1]:



表計算ソフト「Excel」で作成したシートを使い、トップを塗っている。